

# 廣池千九郎の教師論

諏訪内敬司

廣池千九郎は昭和10年に道徳科学専攻塾（本科と別科）を開設しており、学校の創設者及び校長として学校教育に直接携わっている。『道徳科学の論文』を完成させた廣池は、モラロジーの研究・普及のために社会人を対象にした社会教育を中心に活動を行っていたが、モラロジーを確実に理解してもらうためには正式の学校教育が必要として大学設立を構想し、その第一歩として専攻塾を設立した。ここでは、社会教育家ではなく学校教師という観点に絞って廣池の教師論を論じる。

## 初等教育段階の教師

廣池は弱冠14歳にして、母校の大分県中津の永添小学校の助教となった。3年後に正教員の資格を得るために助教を辞して大分県師範学校入学を目指した。曲折を経て師範学校卒業資格試験に合格し、19歳の春、正教員として山間地の小学校教師となっている。

そこでは、農村の経済的に困窮した状況、子どもは貴重な労働力となっているために、学校に通える時間も資金もないことなどへの対策として、昼間学校に行けない子どものために私設の夜間学校を開設し、その運営方法なども研究している。

### ① 教育の目的

小学校教師時代、学校教育の目的として、単に知識を教授して立身出世に寄与するのではなく、実業を重視して実生活に役立つこと、さらに社会の福祉に寄与するなど、「何のために学ぶのか」を常に意識して教育すべきとしている。この基本姿勢をラロジーでは発展させ、教育は「団体・国家維持発展平和のため」「人類の生存・発達・安心・平和・幸福の基礎」であるとす。そして、「神の知識を人間の心・精神に移植／扶植して品性を完成させて人間の心・精神を啓蒙開発し、さらに神の慈悲心を人間の心・精神に移植／扶植して人間の心・精神を救済すること」が真の教育であると高邁な理想に結実した。

### ② 教師の基本姿勢

教師の基本姿勢として、偏った立場や主義は児童の

言行に多大な影響を及ぼすのでと、反対している。また、教師たるべきものはその任務の重要性に鑑み、常に注意を怠ってはいけないと、身の処し方を警告している。

夜間学校では単に知識だけではなく、「社会の信用を得るには完全な道徳の実行に基づく」として言葉使いと礼儀作法の教授と練習をも重要な教授項目に挙げている。さらに、親孝行と親に安心を与える秘訣を教えて実行させて親の信用を得るようにすべきとしている。

### ③ 寄宿舎教育の原点

廣池は明治21年秋、中津高等小学校に転動した。高等小学校は中津地方に1校しかなく、遠方から通学する児童もいた。そこで廣池は寄宿舎を設置して遠方通学児の負担軽減に、と3名を寄宿舎に預かって食事や健康に留意しながら朝夕に勉強を見てやり、成績が上がって評判になって最終的に40名の児童を収容した。廣池自身、師範学校受験浪人中の10カ月間、小川含章の私塾「麗澤館」に入り、師匠・塾生と寝食を共にして学んでおり、この時の体験が小学校の寄宿舎運営に活かされた。後に早稲田大学講師時代や神宮皇學館時代にも寄宿舎制の私塾や寮の構想を練っている。寄宿舎教育はやがては、道徳科学専攻塾となって開花した。

## 中等教育段階での教師

### ① 中学校長として

廣池は大正2年（47歳）、私立天理中学校の校長に就任した。校長なので教科の授業を直接に担当したのではなく、特別講話や生徒指導、さらには教員の指導などに当たっている。その特徴は、校長自ら率先して範を示したことである。例えば、教員トイレ掃除をしている。取得の非常に困難な法学博士号を得ており、また1年前には生死の境を彷徨った体であるにもかかわらずである。同中学では生徒が全国から集まっており、宿舎で生活していたので、自ら宿舎を巡回して問題のある生徒には直接訓戒もしている。また、学校教育における道徳教育の重要性を指摘し、道徳の効果を説い

て実行を勧めている。

## ② 学習指導

勉強面では、中等教育段階では、苦手の教科があっても各教科を均等に学ぶことを心がけるべきとする。あらゆる分野にわたって学び、その基礎の上に専門化を図るべきという考え方である。具体的な勉強法としては、毎日帰宅後2～3時間、さらに日曜や祭日でも休まずに4～5時間は勉強すべきとする。復習、授業への出席を強調し、試験は日頃の努力を見るためのものであり、試験前だけの勉強は誤りだと平素の努力を強調する。勉強の仕方も小学校段階でのように教えられたことを覚えるのではなく、自分で調べてきたものを授業で確認するという方法でないと力がかかるとする。そして、勉強が出来る、出来ないではなく、努力したかどうかで学業面を評価するよう教員に要請した。

## ③ 生徒への愛情・情熱

挨拶が礼儀の基本だとして校内では教師に対してだけではなく、生徒同士も出会う度に会釈すること、校外では礼を交わし、素知らぬ顔をして通り過ぎさないように求めた。

教師としての基本的構えとして、学科指導も生徒指導も共に誠実、公平、熱心、忍耐を求めている。教師の言うことを聞かない生徒にも肉親の心を以て接すること、生徒に対する優しさとして「慈悲寛大」を強調するが、我が儘を認めるのではなく、慈悲の中にも形の上では規律や厳格さを守るようにした。生徒の名前を呼ぶ時は「さん」を付けて、誠実さと熱意を表現して生徒を感動させたいとしている。さらに教師が威厳を保つためには、教科専門家としての十分な学力と、自己修養が必要であるとした。

生徒指導の面では、校長が人格的に十分な感化を与えていれば問題を起ささないはずであり、問題が起きた時は最終的には「校長の不徳の致すところ」と自己の責任として引き受ける姿勢であった。不祥事を起こした生徒を組織としては処分せざるを得ない場合もあるが、生徒の反省心を引き出し、更生と将来の幸福を願っての処分にし、学校だけではなく、家庭や宿舎も一丸になって生徒の立ち直りを援助すべきであるとした。

## 高等教育段階での教師

### ① 寄宿舎制度による人格教育

晩年に開設した専攻塾において、寄宿舎制度を授業

以上に重要と位置づけた。寄宿舎での寝食によって学生の品性を磨き、教員だけではなく職員も園内に居住し、血族的な親愛の情を持って学生に接することを求めた。寄宿舎には「自我没却神意実現之自治制」の額を掲げ、監督者を置かずに学生が相互に切磋琢磨して人格を高めるようにした。特に食事を重視して食堂も人格教育の場とし、夕食時には教師と学生が食卓を共にし、夕食後には宿舎において週に2回、講師や学生の講演会を持つようにした。浴場での入浴規則、トイレでの用便規則など、日常生活の細部にわたって実践生活を指導している。

### ② 学習指導

知識の教授法としては中学校長時代の考えを発展させて、教師は基本を教授して、後は学生自身が図書館で自ら学ぶ「自修」を強調し、高等教育レベルでは「経を以て経を説く」と、解説書ではなく原典によって学ばなければならない、としている。さらに、入学・進級・卒業試験は一切行わずに、学生自身が納得すれば進級・卒業するという「無試験制度」を実施した。

### ③ 運動面

自身が過度の研究によって病弱になった轍を生徒学生に踏ませまいと、健康面には非常に気を遣い、身体を鍛えることを重視した。しかし危険なスポーツは禁止、対外試合も単に競争心を煽るだけとして認めなかった。肉体の限界を超えるようなハードな運動は、かえって寿命を縮めるとしている。勝敗にこだわらなく、身体的健康維持に寄与すること、精神的な忍耐力をつけることを運動面に求めた。

## 参考文献

- 大澤俊夫『青年教師廣池千九郎』廣池学園出版部、昭和57年。
- 江島顕一「廣池千九郎の教育思想—中津時代に焦点を当てて—」『モラロジー研究』第72号、モラロジー研究所、平成26年。
- 諏訪内敬司「中学校長としての廣池千九郎（上）（下）」『モラロジー研究』第39・40号、モラロジー研究所、平成4年。
- 廣池学園五十年史編纂室編『廣池学園五十年史 第一卷』廣池学園、平成4年。